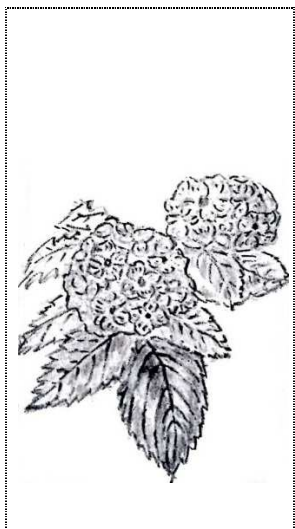

一部50円です

梅雨どきの雨



じとじととするつゆ時は気分も晴れない。家中のものが湿気をおびじとじと感がまん延している。かやぶき屋根であった頃のことである。梅雨時になると出てくるものがある。ムカデが屋根裏から落ちてきて畳のうえをいそがしげに這いまわるのである。大きな蛇もたまにはとぐろを巻いて押し入れなどにいることがあるのだが、驚くだけでさほどの怖さは感じないがムカデはちがう。

ムカデにかみつかれると神経をやられるようでマムシと同じようにみんなが怖がっていた。田舎の生活にはいくつかが怖いことがある。よくあるのは、蜂である。カメ蜂に刺されると大変だ。白い土蔵の正面の屋根裏に大きな巣を作っていたので、雨の日に兄とふたりで長い竹竿を突き刺して落そうと突いたら、蜂が竹竿を伝って飛んできた。一瞬にして兄は刺され顔が大きくはれあがり目がつぶれそうになった。

雨は気まぐれにふる。朝、傘を持たずにでかけ帰り際に雨がふりだすと学校に備え付けられた村の名が書かれた蛇の目傘を借りて帰る。ある時、傘が足りなくて村の女の子と相合傘をしなければならぬ事があった。いつもは砂利道にできた水たまりを長靴で踏みつけわざと水しぶきをあげてよろこんでいたのに、その時は、幼いながらも緊張して身体半分を濡らしながら片言もしゃべらず歩いて帰った記憶がある。

うとうしい空気がそこら中にただよっている梅雨時に、ピチャピチャふる雨は私を家に閉じこもらせ、外へ出られないもどかしさでいら立たせたが、いやでも宿題を自然とさせてくれた有難い雨でもあったのだ。雨は一年中ふる。季節によってふる雨はちがう。夏の夕立は怖い、秋の雨は冷たい、冬の雨は凍えさせる、春雨は心地よい小ぶりだ。

無邪気な子供だった為か、今ほど雨が嫌いではなかった。いや、むしろ楽しんでいたにちがいない。退屈な日々を雨がまぎらわしてしてくれたのかもしれない。(嘉)

女人結界6

女性不浄観の形成と被差別民の発生は、ケガレという問題で深く結びついている。

九世紀の終わりになると律令国家としての組織が緩み、規制力が弱まって、官庁に属していた職能民、手工業者とか芸能民が独自の集団をつくるようになり、浮浪する人たちが増えてくる。遊行女婦(うかれめ/あそびめ)という女性職能集団も官庁や神仏に所属し、交通税を免除されて、広域に遍歴した。

京都にはさまざまな人たちが集まるようになって人口が肥大し、疫病が深刻化するようになる。人びとは恐怖におののき、怨霊とか物の怪が跳梁する見えない世界を妄想し、おびえるようになるわけである。そのなかでケガレ観が増殖してゆく。それが十く十一世紀、中世である。

ケガレとは何か。歴史家の網野喜彦さんは「ケガレとは、人間と自然のそれなりに均衡がとれた状態に欠損が生じたり、均衡が崩れたとき、それによって人間社会の内部におこる畏れ、不安と結びついている」という。たとえば人の死は欠損で「死穢(しえ)」であり、逆に人の誕生は均衡を崩す「産穢」、火事は「焼亡穢」、巨木や巨岩を動かすような、自然に人為的変更を加えることもケガレととらえた。殺人や盗みなどの罪にもケガレが起ると考えた。ケガレは伝染する特徴があり、いろいろな手続きに従ってキヨメなければならぬ。(猿)

たまごから

高槻に根ざして66年になる。風景がすっかり変化し住んでいる人達の顔ぶれも若くなってしまった。古老といえ、自分もふくめて数える程、隣には8階建てのマンションが建ち並び、完売となり夜ともなれば、すっかり大都会になってしまった。

ふと私の胸によぎるものがある。古い空き家が林のようになり、野良犬の住み家、猫の親子連れの散歩、家の鶏が垣根をこえて、青葉をつばみ、時には卵まで産み落して、我が家へ帰ってくる。

我が家の義父いわく「ここに二三日卵が産んでない。おまえ達が餌をやらぬからや」とブツブツぼやきながら、卵をさがしている様子。知らぬが仏。「よそさんで産んでるわ」

地主さん考えた「犬、猫、鶏が入ってこないように頑丈なブロック塀に変わった。

「卵産んでたけど、散々荒らされたから、もらっときますわ」小母さんの声もよみがえってくる。時刻を知らせ庭草を残さず食べた鶏、鶏糞も肥料になり卵も産み、弁当のおかずは最高だった時代。

二〇〇四年に鳥インフルエンザが発生した折、小学校で飼育する鶏やチャボが姿を消した。保護者から「子供に病気がうつる」と不安の声、卵を生で食べるのは日本人だけ。

またしても発生、三年振りとか、鳥インフルエンザを封じ込めようと熊本では、みんなが血のにじむような努力して頑張っけいられる。記事を見て、いろんな想い出がよみがえってくる。

おいしい卵がきつと産まれてくることだろう。

地名

走る電車に腰かけてウトウトしていたら、突然大きな声の二人ずれが前に立った。

楽しそうな会話の中から「レンマのほうに」さて何のことだか、聞くとともにしに耳を向けた。

それは練馬、ねりま、というのじやない。地名の読み方はむずかしい。野崎観音さんへの道中、私はどう考えても読めない字がある。

「放出」はなてんと車内放送が流れる。きつと「ほうしゅつ」と読んでしまうのだ。

サラリーマン川柳に、「何様ですかと聞く新人」

社会に出たばかりの人に、電話の応対から、いろんな作法、はては地名の読み方ひとつに至るまで赤面するだろうと思う。

「柏原」「かしはばら」「かいばら」「石生」「いそう」と読むのですよ、丹波では。

やってきたインフルエンザ

インフルエンザがやつと峠を越したようだが、まだまだ油断が出来ない。

急に熱が出て、関節や筋肉などが痛くなった、すぐ医者に診てもらったほうがよい。受診するように老人宛に案内状が届く。必ず受診するようにと念が入っている。

ありがたい時代が来たものだ。「手洗い」「うがい」をあわててやっても手遅れの時もある。

他人に感染してしまえば、ある程度水が引いたように収まってしまおう。

スペイン風邪、香港カゼが一般に知られるようになって、人、物、カネが世の中を飛び交う時代だから、インフルエンザも若い人を好むらしい。おかげで最近カゼをひかなくなったもの。

自動支払機に、「おだいじに」といわれてしまった。「ありがとうごさいます」なら私もまだ理解できるの

だが。

この頃の機械は、さまざまな言葉をしゃべる。

「お風呂がわきました」「換気をしなさい」

親切だが、うるさい時もある。余計な感じがしないでもない。

これで安心して暮らせると思ったら大きな間違い。また次の手が待ち受けているからご用心を。

俳句

土田 裕

二の腕も出して薄暑のすがすがし
古寺の昏さは見せず柿若葉
名園の降りみ降らずみ青楓
翻るとき真白なる新樹かな
五月雨や色とりどりの子供傘



空想の世界

梵店主

人間とは厄介な生き物だ。自分で自分をコントロール出来ないからだ。

よっちゃんは「考えないでおこう、考えたら病気に負ける。難病とはそういう病だ」と頭の中では分かっているのだが、よからぬ思いが消えない。

気分を変えるには、人と話したり、本を読んだり、何かをすれば少しは落ち着くのだが、相部屋の病室では静かに天井を見上げているしかなかった。

そんな悶々とした気分を晴らしてくれる場を見つけた。それは、病棟に隣接している公園である。入院患者がリハビリを兼ねて気兼ねなく自由に散歩できるようにつくられていた。芝生や小さな小川や池、花梨などの木々が植えられ憩いの空間になるように設計されている。朝は5時から夕方8時まで開放されていた。

入院生活に少しなれたよっちゃんは毎朝5時過ぎになると、静かに起きてエレベーターに乗り公園へ行く。未明の公園にはすでに幾人かの病人がいた。歩いていける人、ベンチに腰かけている人が薄暗い朝もやの中に見えた。

よっちゃんは、公園の入り口にある

テラスに立って大きく背伸びをする。筋肉が細りフラフラする身体をゆっくり動かしてみる。この病気は、特別な痛みがあるわけではなかった。うまく表現できないが「痛い手前の辛さ」が続く。無理に身体を動かそうとすれば、倒れてどこかを骨折しそうな不安がつきまとっていた。まさにヨチヨチ歩きの人であった。

筋肉がなくなるといことは、実は恐ろしいことである。人の身体は多くの筋肉で守られ動いている。筋肉が無くなれば骨、筋、神経、皮膚と一緒にひびいたようになり、足をさわっても骨だけになり、神経にもさわるから過敏になってしまう。少し触っただけで痛みを感じてしまう。少し筋肉が人の身体を守っていてくれるのか、はじめて気がついた。筋肉が身体のか、はじめて支えてくれている。その筋肉が破壊されて弱ってしまうと人は動くことが出来なくなる。こんな当たり前の事をこれまで知らなかった。

公園の中には、ゆるやかな傾斜がつけられた散歩コースがいくつかわ作られている。よっちゃんは、前につんのめってこけないように手すりをもちながらゆっくりと歩

公園の東には万博公園の森が広がっていた。太陽が昇つてくるとまばゆいばかりの陽の光で公園は満たされる。池の鯉もよく見える。

よっちゃんは、池のそばのベンチまで歩いてきて、腰をおろす。

よっちゃんは、池のそばのベンチまで歩いてきて、腰をおろす。

毎朝歩いている患者を見ながら「おれも、あの人のようにまた歩けるのだろうか。いや、今は先のことを考えたらあかん。黙って時を食うのだ。ただただ時間を過ごせばいいのだ。考えずに」と幾度も自分に思い込ませようとする。

人はすぐに考えたがる難儀な生き物だ。考えないと思ってもすぐにあれこれと想いをめぐらすのである。考えないとすることは、非常に難しい事だ。人が考える時には、必ず言葉をさがす。多くの言葉を探しだし、つなげて考えるのである。言葉さえなければ考える苦労は無いにちがいない。

確かに、人は言葉によって考え文明を生み出してきたが、言葉によって人は苦しんできたともいえる。言葉とおそろしいものである。我々が多くの苦悩から救われたいと願うなら、言葉を覚えな

しき紛れに思った。しかし、覚えてしまった言葉を消すことは出来ない。頭に叩き込まれた無数の言葉を消し去ることは、言葉を覚えることよりもはるかに難しいと思える。ひと

は、幸せを求め豊かな生活を夢見て多くの言葉を考え使ってきたが、同時に我々を苦しめる言葉の脅威も果てしなく大きくしてきたのである。もうリセットは出来ない。

言葉という宝物には途方もない破壊

力が潜んでいる、ということを知って、よっちゃんは、あらためて言葉を慎重に扱わなければならない、思った。よっちゃんはベンチから立ち上がり、また歩いてきた道をゆっくり歩く。途中に幾人かが集まって煙草を吸っている個所がある。

「いいなあ、おれもまた吸える時がくるのだろうか」煙草を吸うような気分にはとうていなれないよっちゃんである。病院内は全面禁煙なのであるが、この個所では黙認されていた。外科の患者であれば喫煙しても関係ないからだろう。

一時間ばかり外の空気を吸うと、気分が変わる。病室に帰ると、早朝の採血がもう始まっている。

よっちゃんは、洗面所へ行き、熱い湯で顔を洗い、身体をふく。熱湯を浸したタオルで全身をふくと気分が晴れやかになる。

7時半からの朝食には、まだ時間があるので、読みかけの聖書を出してきて読む。不思議にも聖書の言葉には心を乱されることなく淡々と読める。それは、聖書が多くの子供たちの言葉を集めて書かれた為に、モノの見方が多面的で、あらゆる視点から繰り返し書かれていた為に、言葉の持つ刺々しさが消え受け入れやすい、とよっちゃんを感じていたからである。

とうとう、待ち望んだ日がやってきた。ダイエットを始めて苦節四カ月。

周囲の人間に「ちよつとオ、痩せたんちやうん！」と言われ始めたのである。長かった…。

娘（私）が太る一方であることを心配し、顔を見れば、「アンタ、また太ったん違う？」と言わでもがなのことを言い、「運動をしなさい、運動を」「テレビで言うてたけど、体重計で毎日測るだけでも体重って減るらしいね」「ウエストを絞めるようにせんと、ナンボでも太るよ」とアレコレロうるさかった母親。その母親、太ったことには敏感なくせに体重が減ったことにはとんと気が付いてくれないので、「あの、私、だいぶ痩せてんけど」と自己申告。

「え？ あら？ 確かに、アンタ！ お腹周りが」。

その夜、弟が笑いながら電話をしてきた。「ふふふ、親、だましたらアカンで」。全然、信じとらん。強力なボディーツか何かを買って装着し、母親をあざむいたと思ひ込んで。まあ、それも無理ない。「俺、痩せているのん、生まれから一遍も見たことないからな」。ほつとけ！「ほんじゃ、今度会う

まで、リバウンドせんように」と切りやがった。まあいいや、私自身が信じられないのだ。

仕事先でも騒がれた。「え〜っ、ほんまや、○子さん、痩せてる〜っ」。

「どうやって、痩せたんです？」

人生で、人からこんな風に言われる日がくるとは思っていなかったもので、夢のようである。「糖質制限って、糖質

だけ減らすやり方やねん。アンタらが一向に気いついてくれへんから、体重

計がつぶれただけちやうかと心配やってんで」と私、ニコニコ。

みんな、なんていい子なんだろう、

と思いかけたが、一人がまったく悪げ

なくこう言った。「でも、私は前のころ

っとした○子さんの方が可愛かったと

思うな。○子さんらしくて」。一人が言

うと、必ず呼応する奴がいて、「うん、

前はもつとお肌がぴんつと張ってた気が

する…（トシの割に）」。

私は根っから正直者なので、そう言

われると、つい言ってしまった。「実は、

そうやんねん、まずお乳がペチャパイ

になって、お尻の肉がげつそり落ちて、

太腿の内側がシワシワで…なんか、太

ってた頃の方が、体はコマシやったよ

うな気が自分でもするねん」。

「ダメですよ、筋肉つけて痩せな！」

「そうそう、一年で五キロぐらいがち

ようどいいんですよ！」。

みんな、全然太っていないのだが、ダイエットに関する知識はやたらに豊富だ。「四カ月で十キロは急激に痩せ過ぎ！」。

しかし、不思議なもんですなあ。褒められてもいないのに、顔がにやける。この私が「痩せ過ぎ」と非難されるなんて。

恐るべし、糖質制限ダイエット！

「やつれた！」「そお？（ヘラヘラ）」

「トシ取って痩せると貧相やで」「言え

てる！（うふふ）」てな感じ。

その昔、中学か高校の教科書に芥川龍

之介の「鼻」という小説が載っていて、

うら覚えだが、鼻が異様にでかい和尚さ

ん（だったような）がせつせと弟子に揉

ませたり踏ませたりして標準サイズに

すると、周囲の評判が悪い。人間の心理

ってそんなもんよね、というような内容

だったと思う（間違っていたら、すみま

せん）が、その話をつい思い出した。た

だ、私は和尚さんとはキャラが違うの

で、元の自分に戻ろうとは思っていない

（今のところ）。

見た目の問題はともあれ、体が軽いと心

も軽い！ 前は勧められても運動など

まったくする気がなかったのに、狭い室

内でびよこびよこお尻歩きに励み、先

日なんか東急ハンズで組み立て式のフ

ラフープを買ってしまった。フラフープ

が美容や痩身にいいのかどうかさえわ

からないのだが、売り場で見えたら、

「やってみよう」という衝動に駆られた。食べたいという衝動になら、いつでも駆られていたが、フラフープをしたい衝動なんて。値札を見ると九八〇円。衝動があつという間に消え去つても、まあ許せる範囲なので買った。どうせ、すぐに飽きると思うが（その前に、フラフープを回せるほどの空間をどうやって確保するかという問題があったんだけど）。

それに、人生で太ったことがない連

中からは「前の方がよかった！」なん

ぞと無責任なことを言われても、デブ

仲間の反応は違う。まず、怒られた。

「何で、もつと早うに言うてくれへん

かったん？」「四カ月前から？ ズル

イ！ 四カ月、損した！」。次に賞賛の

嵐。「絶対、痩せてるわ」「ああ、やつ

ぱりいいよねえ！」。

私に糖質制限を教え、励ましてくれた

親友のF子にはお返しができないが、

デブ仲間に対して、私がF子になるこ

とはできる。「糖質も全然、食べへんわ

けちやうよ、最後に少しだけにしたら、

本当に体重が減るから、やってみ！」。

もちろん、肉が落ちて醜くなったこと

も、糖質制限には賛否両論あるとテレ

ビで医者が言っていたことも伝えた。

それでも痩せよう、痩せたいと願うのがデブという生き物なのである。

Aさんの場合

伊藤 明(精神科医)

今回は、私の出会った方について、お話ししましょう。

Aさんは41歳。昔風に言うところのうど男の厄年にあたります。税務関係の会社に勤めていましたが、一年ほど前から気力が出ない、疲労感が強い、朝体が重く起き出せない、仕事の能率が上がらないなどの症状が続いたため、他の病院で治療を受け長期の療養休暇を取っていました。

休みはじめた当初は気分的にも楽でしたが、家では薬をのむほかはゴロゴロするだけで、うつうつとした毎日。会社の同僚や家族、さらには世の中すべてから自分ひとりが取り残されてしまったという思い。長男として親のめんどろもみていかなければならない、子どもの大学受験も迫っている。こんな大切な時に、会社にも出ていけない自分のふがいなさ、あせり。自分がつくづくダメな人間に思えてくる。その苦しい思いを忘れようと昼間から酒を飲む生活。そうするうちに肝臓を悪くして内科へ入院。退院後も気分はうつうつとして出勤もできず、禁じられた酒にも手を出してしまう。

Aさんが私の外来を受診されたのはそんな頃でした。状態は「うつ」に間違いなく、それかなり遷延(長期化)していました。表情は暗く、将来の明るい展望を何ひとつ見出せないという状態でした。

治療は薬の調節から始めましたが、このように遷延した例では薬による治療だけでは困難なので、考え方つまり「こころのくせ」を修正するという課題に取り組むことになったのです。

◆その後、私との対話を通して次のことが明らかになりました。Aさんは小児期から軽い歩行障害があつて運動会が大嫌いだつた。しかしそのハンディを勉強で克服してきた。成績は良かったが経済的な理由で大学進学をあきらめ、高卒後、現在の会社に就職。入社後は仕事でがんばり、いろいろな困難を切り抜けてきた。二十代前半で結婚、三十代始めで家を購入。

三十四歳から税理士をめざして勉強を開始。会社勤めをしながら毎日深夜まで受験勉強する生活を五年間続けみごと合格。同じように税理士をめざしていた仲間はずべて途中で脱落し、資格を取ったのはAさん一人。翌年上司が病で倒れ、Aさんは三階級特進の昇進。その頃でした、何か歯車がくのはじめたのは。

年齢四十。昇進後Aさんは仕事に邁進

しますが、ある時決算書類に自署し押印する責任の重さにガク然としてしまう。それ以降強い疲労感を感じるようになり、前述のような状態に陥り出勤できなくなっていました。

◆Aさんは歩行障害を克服するため、若いころ登山を趣味にしています。仲間と一緒にけわしい山を征服することは大きな喜びでした。

「あの頃は頂上をめざすこと以外は全く頭になかった。頂上に立ったときの達成感、爽快感は他の何ものとも比べられないものだった。ところが三十代になると足の具合が悪くなり、医者から無理な登山を禁じられ、ぶつたりやめた。頂上に登れないならやめたほうがましと思つたから。」

Aさんの話をじっくり聞いていると、誠実さ、生まじめさとともに「負けるものか」という強烈な競争意識が根底にあることに気づきます。コンプレックスをはねかえすためのがんばり、高い目標に向かって努力を持続させていく強い意志の力。それは登山のエピソードや五年がかりで税理士試験をみごとパスしたことによくあらわれています。Aさんの二十代、三十代は、頑張りの成果が花開いた時期といえます。

◆では四十歳になってあらわれた「うつ」をどう考えたらよいのでしょうか。

五年間没頭した税理士試験にパスし目標がなくなってしまうからでしょうか? それもあるかも知れませんが、それだけではないと思います。

若い頃は、「目標に向かって努力すれば必ず達成できる」という信念でがんばり続け、大きな成果を手に入れる事ができました。ところが四十歳になったAさんと、彼をとりまく状況には、それがあてはまらなくなつたのではないのでしょうか。

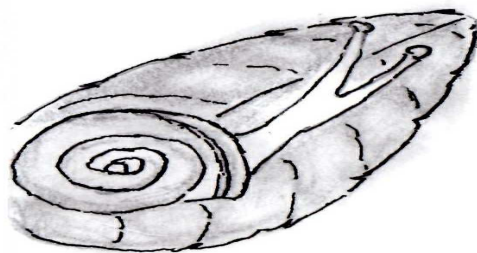
ライフサイクルの視点から考えると、中年の時期になると、自分を取り囲む環境が知らず知らずのうちに変わってきており、若いころと同じような、体力にものをいわせて課題をこなして行くというやり方は、うまく働いていかなくなるものです。第一に、そのような体力は、もうなくなつてきています。第二には、中年期に直面する問題は、若いときのものとは性質が違つてきているといえます。一つの価値観で割り切れるものは少なくなり、いくつもの互いに矛盾する問題の微妙なバランスを探り当てる、という性質のものが増えてきます。こういった問題には「がむしゃらにやる」という態度ではなく、複眼的な視野によつて適切な調節をおこなう、という知恵が求められてくるのです。「がんばればがんばるだけ報われる」という右肩上がりの価値観に合致する時期は過ぎ去ろうとしていました。Aさんは、考え方の方向を変えなければならぬ時期にさし

かかっていたと言えるでしょう。

◆治療の中でAさんには自らの価値観の根底にあるものを再検討してもらいました。これは「こころのくせ」の修正の練習をもらう作業です。これは、言うのは簡単ですが決して平坦な経過をたどったのではなく、時には落ち込み、時にははまり込むということをくり返しながら、徐々に回復に向かいました。この間は対話による治療だけでなく、適度な運動をしたり、精神科デイケアに参加してもらう中でレクリエーションを楽しんだり、趣味を見つけたり、職場とは違うゆつたりとした時間を過ごすことを覚えてもらっています。

回復後、Aさんと交わした登山の話は印象深いものでした。「若いころの登山は頂上に立つことしか頭になかった。そのためにはどんな苦しいことでも出来る自信があった。足が悪くなり無理な登山を止められて山から一切手を引いてしまったが、体調がよくなったらまた登山をはじめようと思っっている。ただ今度は低い山でいい、まわりの豊かな自然に目をやり、それを楽しみながら体に負担をかけない範囲でやろうと思う」

その後Aさんは会社を辞められ、細々ながら開業をされたのでした。



素老人☆よもだ帳(2)

○はじめに

子どもは親の背中を見て育つ、という。実際に親の背中を見たかどうかは問題ではない。小さい頃に聞いた親の何気ない会話を大きく覚えて何かの拍子に思い出し、こんなことを忘れないでいたと気づくというようなことのかなにも、ある意味では親の背中を見て

坂本一光

育った結果があるのかもしれない。そういう話から、素老人よもだ帳を繰ってみたいと思う。

明治40年(1907)生まれの父は、家では「そんなこと言わんでもわかっところはや」ともの言わぬタイプであった。しかし、外ではよもだだったのではないかと私は思っている。一方、大正3年生まれで7歳年下の母はいつも、「言うてくれなウチにはわからん」と愚痴を言っていた。その父母の問答というか、結果としては父一人の自問自答に終わったこんなことがあった。

○食うために働くか働かのために食うか

貧しさゆえの父母の問答

はつきりとは覚えていないが、私が小学校2、3年生の頃だろう。遅い昼飯を食べに父が帰ってきた。父は町の郵便局に勤めていて、保険の外交を担当していた。農家の人たちが昼飯に家に戻る時を見計らって訪問し勧誘するためなのだろう、自分の昼飯の時間をずらすくらいは自由はあったようだ。帰ってきて飯を食べながら珍しく父が口を開いた。

「今日、みんなと話しとったんじゃが、人は食うために働くんか、働くために食うんかという話になってのう、みんなは、そんなもん食うために働くに決まっとらい、と言うんやが、

わしは働くために食うんやと思うがのう。どうじゃるか」

母は何も言わず父に飯を盛っていた。しかし、「親子七人(ついでに言うとうと、私は男5人兄弟の末っ子である)、毎日食べていくのにひいひい言っているのに、男はよもだやのう」くらいは思ったはずだろう。今思えば、父の自問自答を聞いた私は父以上によもだであったかもしれない。学校から帰って麦飯の冷や飯が残っていると親に隠れて醤油をかけて食っていた私は、「飯を食うのは腹が減るからだ」と何の疑問も感じていなかったのだから。この経緯は私に、大人というのは子どもが思いつきもしないような大きなこと、なにかそら恐ろしいことを考えているものだ、と教えてくれた。

○食うことと働くこと、そして生きること

今思えば、食うことと働くことに加えてもう一つの視点が必要だろうと思う。それは、生きるという視点である。

食うことと生きることの関係は言うまでもない明白な関係である。食うためには働かなければならないという意味での食うことと働くこととの関係は、社会が個人に労働への参加を求める必然の関係である。よほどの資産家でもなければ、働くことから自由な個人はいない。働くために食うんじやないかと父が言ったとき、父は働くという言葉に生きるという意味を重ねていたのだろうと思う。

働くことと生きることの関係は誰もが問わなければならぬ関係である。

老人の戯言

駒田明克

以上述べたような父母の問答を私が思い出したのは、次のような先人の言葉に出合ったときである。

「わたしたちは、いわば、二回この世にうまれる。一回目は存在するために、二回目は生きるために」(ルソー『エミール』(中)、5頁、岩波文庫)この言葉が下敷きにあるのかどうか、数年前のNHKドラマ『大仏開眼』中のセリフに、

「人間は二度死ぬ。一度は肉体が減んだときに、二度目はその死を社会が忘れたときに」、とあつて驚いた記憶がある。それはさておいて、人間が生きること、死ぬことは社会と深く結び付いている。

「人間はいつ自分になるか」と問いかけた哲学者は、「自分になるとは、社会の中の自分の位置に気づき、社会に向かつて働きかける方向を決める」ことであり、そのとき「人が生まれる」と書いた(鶴見俊輔『人が生まれる・五人の日本人の肖像』、筑摩書房、1972年)。

こうした先人の言葉を読むと、大人は恐ろしいことを考え、また言うものだ、とこの歳になつても思うから不思議だ。「お前はいつ自分になるのか」、とまだ言われている気がする。よもだよのう。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

最近の日本の歌は

何故心に残らなくなったのか

最近では、我々老人族の口ずさめる名曲がほとんど聴かれなくなりました。以前は、年末が近づくと、今年のレコード大賞は誰だろうという話題が世間を賑わしたものでした。

近年、テレビ・ラジオ等巷に流れる曲は皆アップテンポのものばかり、一度二度聴いても耳に残らない。歌詞も意味不明のものが多く、歌う歌手の発声たるや、特に若い女性歌手に多いが、変な高音を強調して耳に素直に受け入れられないものばかり。これらは小生の大嫌いなラップミュージックの影響を多分に受けているように思います。

何故、音楽の世界がこのようになってしまったのでしょうか。

昔はポピュラーな名曲が映画音楽のテーマ曲として世界から入ってきました。耳に残る名曲「追憶、慕情、虹の彼方に、ムーンリバー、シェルブールの雨傘、ある愛の詩、エデンの東、モノリザ、枯葉、…」今でも、すぐ口ずさむことができる曲ばかりです。

日本の名曲でも、好き嫌いは別にして「シクラメンのかほり、知床慕情、奥飛騨の宿から、瀬戸の花嫁、港町ブルース、

さだまさしの関白宣言、…等々」名詞も字余りのものが多く、昔、作詞の石丸寛さんから聞いた日本語を大切にの言

今、テレビ等で流れる音楽は、AKB48や何代目かしらないがジャニーズ系の若者グループ、韓国のイケメン・美女グループ、シンガー・ソングライターと称した歌の下手な連中のものばかり。どの放送局もほとんど同じ傾向、NHKも同様。落ち着いた音楽を静かに聴きたいものです。

何故、音楽の世界がこのような傾向になったのか、それは昔も多分にあつたかも知れませんが、今は特に音楽プロダクションの商業主義に全く毒されており、歌手は消耗品、AKB48など素人の少女を短期養成してマスコミを煽って売り出す。我々老人族は個性の見られない彼女らの見分けがつけられませんか？

それともう一つ、日本の音楽のレベルを下げさせているものに、シンガーソング・ライターの出現があります。昔にもさだまさし、小椋佳など立派な歌手が名曲をヒットさせました。これらの人は一部の例外で、今やストリート・ミュージシャンと称する連中が自作の曲をヒットさせて、メジャーレビュウしては直ぐに

消える世の中です。歌は基本発声の出来てない地声、歌

それに加わうるに、屋外広告物やポスターのケバケバシイこと。昔のような落ち着いた街並みはもう還らないのでしょうか。もう手遅れの感がありますが、行政面での強い規制も必要と

一時流行った景観という言葉がむなしく聞こえます。

幻の花

大江雉兔

京都の府立植物園でメコノプシス・グランデイスとメコノプシス・ベトニキフオリアが咲いたというので出かけてみた。もちろん、そんな舌を噛みそうな学名に動かされたのではない。説明に書かれていた「ヒマラヤの青いケシ」という通称に反応したに過ぎない。そして青い花を間近で眺めた時、こんなもんか、という感想しか持てなかった。

ブルーポピーは、ヒマラヤが遙か遠くにあった頃には幻の花だった。「ヒマラヤの青いケシ」という通称が有名になったのもそんなイメージの反映である。とあるブログでは次のような話が紹介されている。十九世紀の終わり頃、フランスの宣教師が雲南で美しい青い花を発見して標本を本国に届けた。「ヒマラヤの青いケシ」の発見である。しかしこの時点では種子は送られなかったのでヨーロッパでの栽培には至っていない。それが園芸種として広く知られるようになるのは、最初の発見から半世紀近くが経過したのち、キングドンウオードが大量の種子を持ち帰ってからのことである云々。ブルーポピーの歴史を精確にたどると、ヒマラヤからもたらされる以前にも青色のケシは栽培されていたとか、キングドンウオード以前にも少量の種子は採取されていたなどの記録も

見られる。しかし育成には失敗しており、稀少性が大きく取り沙汰されたいらしい。このような事情もあって、十九世紀から二十世紀初頭にかけては、ブルーポピーは僻遠の地に対する情熱を、具体的に分かりやすい形に置き換えるアイテムにもなっていたのである。

ところが植物園で目にしたブルーポピーからはそうしたロマンめいたものを感じることはなかった。「もう少し透き通った青色だったらよかったのに」とか、「もっと神秘的な濃さがあったらよさそうなものなんだが」といった勝手な思い込みが浮かびはするものの、憧れていたものへの邂逅感は微塵もなかったのである。ヒマラヤがすでに観光地化されているためだろうか、それとも見る側の感性が麻痺しているためだろうか。おそらくその両方だろう。要するに幻を幻たらしめる要素は、植物園で見るブルーポピーには備わっておらず、眺める私の側にも幻に感応する素地がなかったのである。ブルーポピーが文字通りの幻だった頃、その青色は絶望的な距離感を伴うものだったに違いない。事例としてはおかしいかも知れないが、『竹取物語』を引き合いに出してみる。かの物語の中で、言い寄ってくる男たちを退けるためにかぐや姫は、仏の御石の鉢・

蓬莱の玉の枝・火鼠の皮衣・竜の頸の五色の玉・燕の子安貝という五つの難題を提示する。これらを持つてくることで誠意を見せろというのである。物語はこの五つの宝物を巡って進展するのだが、面白いのはこれらが経典や漢籍の中でのみ知られているものだったことである。たとえば、仏の御石の鉢であれば、玄奘の『大唐西域記』に紹介されているレア・アイテムであるといった具合にである。これなどは、標本だけで知られていたブルーポピーを生きたまま持つてこれと言っているのに近い。

かぐや姫の時代の天竺が想像の中のみ存在する幻の世界だったのに比べると、キングドンウオードにとってのヒマラヤはイメージ可能な距離の内側であるといった違いはある。さらにブルーポピーの種子を持ち帰ることがビジネスになることを知っているスポンサーがいたことも大きい。すなわち探検旅行を実行に移すことのできる条件が整っていたのだが、それでも容易に手の届くところにあつたわけではない。

かぐや姫の時代における仏の御石の鉢、キングドンウオードのブルーポピー、これらの横に二十一世紀のブルーポピーを置いてみる。そうすると「幻の花」とも呼ばれていたということは歴史のページで理解することは可能でも、その花を幻たらしめていた要素をその場

で感じ取るのは難しい。そこにはもはや距離感など存在しないからである。端的に言えば安易なキャッチコピーとなった「幻の××」というフレーズが残っているに過ぎないからである。グルメ番組や情報誌で紹介される有名ラーメン店が「幻の味」を称しているようなものだろう。

私自身にも問題はある。ブルーポピーを通して見るヒマラヤへの憧憬が浅薄だったがために、実物を目の当たりにしながら何も感じなかったのだろう。たとえヒマラヤの観光開発が進んでいたとしても、ヒマラヤに対して灼けるような思いを一度でも抱いたことがあるのなら、少しは違った形になったはずである。

いつの日か「青いケシの国」を訪れる機会があり、雪嶺と青空を背景にして、丘を埋め尽くして自生するブルーポピーを見ることがあるとすれば思いも変わるかも知れない。しかし、それはスケールの大きな景観に圧倒されただけであつて、憧れ続けた幻に巡り会った時のものとは異なるような気がする。



地球一周旅行記(その一)

世界とは 人類とは何か

若山曾郎

2013年11月22日横浜港を午後に出発した船はすぐに横浜ベイブリッジの下を通過し、しばらくすると遙か遠くに夕日を背にした富士山の姿が見えてきた。このデッキは先程まで見送りの人々と別れテープで賑やかに声が行きかっていた場所とは思えないくらい静かな風景だ。日本という国と暫くの見納めには最上の場面でした。正直に言うともっと日本から離れるという実感がわいたのは携帯電話電波が圏外表示になったときでした。電波で繋がっているという変な安心感はどうやら若者だけではなかったようです。

さて、ようやく自分を取り戻したようにので船内の様子を見に行くことにしました。このオーシャンドリーム号という大そうな名前のついている船は、3万6千t程ある。タイムリーな例で気が引けるが、先日韓国で沈んだ船は6万8千tであるから、いかに大きいかがわかる。その大きな船に制限の3倍積載であれば船は復元力を失うであろう。実際に横揺れ(ローリング)は前後の揺れよりも怖い。私達の大型船でさえインド洋や南極海付近では揺れに揺れた。まるでローラーコースターのようであった。ベッドで寝ていると無重力状態を味わえる。

話は続くがこの度の事故は真に人災である。勿論、医療室もあり医師と看護

師がいる。一通り全体を見て廻ったら、さて次の日からはお姉さまの指示通りに1回、クルーは2回訓練があった。船に1回、クルーは2回訓練があった。船長からの放送でまず一旦自分の部屋に戻りそれから救命胴衣を着て上階のデッキに近い定められたスペースに集合しそれから各クルーの誘導で船外の救命ボートの下に移動するのである。ある訓練の日乗客名簿をクルーが呼んでも返事がない状態が続いた。不心に思った私は質問した。形だけやっても意味がない、返事がない人はどうするのかと。そしたらクルーは部屋にチェックに行っていると言った。それならばということで次の訓練ではわざと部屋で寝ていた。そうしたら本当にドアをノックしてクルーが来た。これで安心したわけである。今回の事故はこのようなケースではない。短期間であるから乗客の訓練はないであろう。しかし、クルーは必ずしなければならぬ。船は構造上ゆっくり垂直に沈むということとは少ないであろう。やはり初動行動が運命を左右する。

時勢がら思わぬ方向に話が逸れたが、取り敢えず船内の見学である。なにせ大型船であり全長200m、10階建ての巨大ビルだ。大ホールが2つ、大レストラン1つ、あとはダンスホールやナイトクラブ、カフェ、バーなどの娯楽施設がある。また売店や床屋、美容室もあり一つの町

である。勿論、医療室もあり医師と看護師がいる。一通り全体を見て廻ったら、夕食の時間になった。3階のメインレストランへ行く。基本的な食事三食は料金に含まれている。朝昼はバイキング形式、夕食はセットメニューだ。誰も知り合いがないので6人掛けのテーブル席についた。初めての乗客との会話である。いきなり隣のおばさんから、あなた初めてとドキッとするような言葉を聞いた。え何回も乗る人がいるの? いずれ明らかになるのですが乗客の3分の一はリピーターなのです。はい、初めてです、どうぞ宜しく。年齢70過ぎいきなりお姉さまからの指導です。貴方この船は飛鳥みたいな豪華船じゃないのよ。受け身じゃだめ、種極的にイベントに参加し、運営のボランティアしなきゃだめ。はい。関東弁でまくしたてられまだ長い先の船内生活のペースが掴めるのかやや不安になりました。そんなこんなで長い最初の1日が過ぎました。3階のマイルームに戻りシャワーを浴びてベットに入りました。室内にバスがあるのは500万越えるデラックスルームだけです。マイルームは1人部屋でも最底クラスなので3階です。

こんな様子で船は初めての上陸地、中国アモイに向けてひたすら航海を続けています。今のところ毎日がイベントと英会話教室で忙しくゆっくり海を眺めている当初のイメージは実現して

間にか眠っていました。さて次の日からはお姉さまの指示通り種極的行動を心掛けました。毎日のイベントは船内新聞が発行されそれに載せられます。次の寄港地の歴史や現状、テーマを決めてのレクチャー、ダンス教室、趣味の自主企画など盛り沢山です。レクチャーはその道の専門家とされる人です。過去には有名どころで池上彰さんなんかも乗船されたいのですが最近経費の関係か大した人はいないようです。後は有料講座になります。私はあらかじめ英会話クラスに登録してため参加しました。先にも話したように基本的にはこの船の乗客は全員日本人です。外国語のクラスには先生として外国人がつかます。彼らは全員ボランティアです。食事を含めた生活はピースボートが負担する仕組みです。やはり外国人は冒険心に富んだ人が多いせいか採用率もかなり高いらしいです。この制度は日本にいる外国人にとっては憧れの的だそうです。

いません。本も10冊以上持つて来て準備をしています。どうなることや。次回もお楽しみに。

B級サラリーマン渡世譚 その⑫

挨拶回り

明石幸次郎

人事部きつての模範女子社員のKちゃん、案内で人事部長席に行く、人事部長のKさんが笑顔で「おう、久しぶりやなあー。S工場勤務は短かったが、エエ経験になったやろ！15箇所ある工場の中でも全ての面において一番厳しいのがS工場や。それを、明石君も身を持って経験したから分かったと思うが、今度はその経験を生かして輸出本部で活躍してくれよ」と名も無き入社7年目の一社員の顔を見るなり、この人の頭のコンピュータが作動して名前、経歴、仕事ぶりなどが、アウトプットされ、言葉となって間違ひなく発せられる。

が、当時は従業員が1万5千人、本社だけで2千人程いたので、全ての従業員の情報がインプットされている訳ではないが、明石が挨拶に行くや、別にアポを取って行った訳でもないのに、転勤先のことまで、頭に入っている。その事に、明石はこの人との距離感が短く感じられ、「はい。やっと工場の仕組み、資材の仕事、人間関係にも慣れて来た時に、転勤を命じるのは、その組織、本人にとつてもマイナスと思われませんが…。もう少し資材を経験したかったです。」と、事前にK部長に会ったら言おうと思つたわけではない言葉を発してしまつた。それに対し「明石君、人事異動というのは、本人、組織にとつて、ベストと言うのは、中々難しいもんで、実際は誰でも不満とか、問題はあつたものや。今回の異動は君にとつては、不満かも知れんが、会社がこれから、大きく伸びる為には国内市場だけに頼るわけにはいかんや、海外の市場に目を向けて、今はアメリカだけに力を入れているが、その他の多くの国に種を撒いたら、今後大きく伸びる国があるはずや。海外の売上げを伸ばす事がこの会社を大きくすることに必ずや繋がる。これは、創業者の遺訓でもあるのやで。又、これを引き継いだI専務の今期の大きな方針でもある。君はちゃんと会

社の今期の社長方針を理解しているのか？最重要方針に海外部門を強化して、売上げを5年後に倍増させると方針でうたつている。その為には、何よりも人材を集めなければならぬ。外部から即戦力で採ってくるだけでは、限界があると思うのや。それで、今回は工場から若手で元気のエエ社員を集めて戦力にしようと言う事になったのや。君もそれで、選抜されたのだから、意気を感じないとアカンやないか。そのことを、君の上司は異動の辞令が出た時に何も説明しなかつたのか？誰や君の課長は？」と思いがけない方向に話が行つてしまい、元上司の名前を人事部長の前で言わないと行けないことになつてしまつた。被疑者が刑事の前で自供するような感じで「O課長です。自称仲代達矢さんです。一応異動の理由は説明していただきましたが、部下の気持ちに沿うような言い方ではありませんでした。」と言うと、Kさんは笑いながら、「O君か、彼は、人事部にいた時は俺の部下であつたから、良く知つているが確かに口下手で説明は余り上手ではなかつたなあ。まあ、人は悪くはないんだが…」と元部下を庇うような言い方をされ、さすがに組織の秩序を重んじる人事部長の言い方だと又、感心した。K部長は「明石君、それはそうとして、2年間の工場勤務で

何を学んできたのや？」と行き成り、鋭い質問をされた。少し間をおき「S工場は受注生産工場です。営業部門の受注計画を基に生産計画を立てて、出来るだけ効率の組み立て計画を各ラインに流します。資材はそれに基づき、部品の取引先に発注書を出します。例外的発注は輸出部の案件が殆どです。緊急で、短期、しかも特別値引き価格です。取引先には量は増えるが短納期しかも値引きされ、これでは、輸出は無理がましですとよく不満を言われました。折角の売上げ増、生産増が、力のない取引先が付いて来なくなり、これに対し力のない取引先を力のある取引先に変えたら済む事やないか？K社のS工場が動けば、何処の取引先でも喜んでついてくると資材の経験のないエライ人は良く言われます。ウチはトヨタでも日産でもないです。発注のロット数の桁が違います。ロットが中途半端なのです。中途半端だけに、無駄の無い情報をタイムリーに流し、段取り良く生産対応をとらせて置く事が何よりもまず、金がかからないし、重要だと分かりました。私が輸出部に行つたら、出来る限りの受注情報は、精度を高め、早く工場に流すように努めたいと経験上思います。工場資材は、川で例えますと営業が川上とすると、海に近い川下です。川上からゴミが流れてくるのを採つて、海が汚れ

ないようにするのが、資材の仕事みたい

などところがあります。営業が流すゴミが

流れて来なければ、もっと資材部門が本

来やらなければいけない、弱い取引先を

切って捨てるのではなく、そこを強化し、

量の拡大に対応できる体制を作ること

時間が割けると思いました。私が、資材

でやり残した一番の仕事は、その、古く

からの取引先の体質強化です。この事は、

主事昇格論文で書きましたが、論文発表

の時に発表時間を私が3分位オーバーし

たため、T工場長から、お前はコスト意

識が足りない、3分という時間をどう考

えているのかと、満座の前でこっぴどく

叱られ、私の論文の味に対しては何も

コメントしてもらえませんでした。まあ、

その時、同席していた部長クラス5人の

中の一人のH部長だけが後で、良いこと

を書いていた、大事なことを指摘してい

た。工場にずっといる人間は思いつかな

い考えや君が工場にいる間は何かあれば

応援するので、是非この課題解決に頑張

れと、気落ちしていた私を激励していた

できました。それで、何を学んだかと言

われますと、資材の課題、工場の課題が

何処にあるのかが見えたことくらいで

す。この課題を解決は出来ませんでした

た。」と話が長くなってしまったと喋り

終えてから、反省したが、K部長は明石

真 無為 無形 ?

造化者 無私

自然 一 ?

無名 自生 ?



「道、ってなんやねん?」

聖書「ヨハネ伝」の冒頭に「はじめに

言葉あり、言葉は神とともにあり、言葉

は神なりき」とあるように、キリスト教

の世界では、言葉は神の光であり、世界

が創造される根源にある。『老子』にお

いては、はじめにあるのは「道」であ

り、それは言葉も光も形も色もない無明

の混沌である。

辻は「われわれが言葉以前の祖先から

縁を切ってしまったているとおもいこん

でいるとすればそれはまちがっている」

と断言する。そして「言葉をもたない人

間の健康な力というものをわれわれは

毎日眼の前に見ることができ。つまり

赤ン坊のことだ。かれらの前言葉として

の創造的意識は泣き声、手足や顔の筋肉

に投影された運動によって表徴される」

と。このようなことを書いていること自

体、僕はトンマな意識による理屈の筋書

きに陥っているのだが、もう少し辻のい

っていることに耳を傾けてみよう。

「詩はまだ言葉以前を領域に含めて生

であることはまちがいない。そして詩の

呼びおこすショックによってわれわれ

は自身のうちに死にかかっている一つ

の魂を原初の健康へ向けることはでき

る。それなしにわれわれには生育しつづ

ける未来への行動はおぼつかない」。そ

してロンドンの動物園のエピソードを

思い出す。

子どもたちの人気者で、従順なペット

だった象が、霧のつづいた湿った季節

に、突然凶暴になって暴れだした。手の

つけられない状態になったとき、群衆の

なかからひとりの老人が何かをつぶや

きながら象に近づいていった。近づくに

したがって象は静かになり、やがてオリ

の前に立つた老人に額をすりつけ、老人

が差しのべた手にハラハラと涙をこぼ

したというのだ。「あなたは象の言葉が

わかるのですか」と飼育員がたずねる

と、「いや象の言葉は知りませんが、軍

人として長くインドに滞在していると

き、かの地の象使いが、病める象があ

と、その魂のために誦^{ホウ}える経文があつ

て、その効果をしばしば眼にしてフシギ

に思い、覚えました。いまその経文を誦

えることを思いついたのです」と答え

た。

「言葉は人間に所属したものだ、詩の

言葉には赤ン坊の声よりも遠く、鳥獸に

ことをこの話は証明しているのではな

かるるか」。詩の不思議な力である。「詩

はいつも予言であり神託の性質を帯び

ている」ということだ。

『老子』全八十一章を詩の形で訳してい

る詩人がいる。荒地派最後の生き残り、

加島祥造である。伊那の老子といわれ、

タオイストを自称する。全訳詩は『タオ

——老子』(筑摩書房)という書物にな

っている。

加島は「あとがき」で、まず二、三章

でも、偶然開いたページでもいいから、

読めという。それは「他の人からの先入

観や予備知識なしに、いまのあなたのま

まで『老子』の言葉に接し、自分のなか

に共感するものがあるかどうか、験^{タカ}し

てほしいからだ。それがどんな共感でも

構わない。とにかくはじめに、頭だけで

解したり判断しないでほしい」とはい

え、コーちゃんには申し訳ないが、先入

観や予備知識をたつぷりと着せこんで

しまったので、まずはそれをぜんぶ脱ぎ

捨てていただかなければならない。

『老子』八十一章から、「道」を原理

的にあるいは比喩的に説明している章

をいくつか選んで、加島さんの訳詩と原

文の読み下しを掲出します。最後に、詩

のような体裁で意識している福永光司

さんの訳解を、付録のかたちで載せてお

まず加島さんの訳詩から読んでいただき、頭で解しようと思わず、老子の声と交信しながら、全身で感応していただければ幸いです。

「それで、おまえはどうやったんや。何か共感したんか。『道』って何かわかったんかいな」などといわないでほしい。辻まことによると、「理解」を要求することは、詩の魂のほうから見れば、墮落といわなければならぬそうです。「感じること」、感性の交信です。

コーちゃんの「『道』って何やねん」という疑問にたいする僕の応答は、とりあえずこのあたりで了とします。新たな発見があったり、またお知らせしたいことがありますたら、寄稿することにしませう。(猿)

第一章 道——名の無い領域

これが道だと口で言ったからって

それは本当の道じゃないんだ。

これがタオだと名づけたって

それは本物の道じゃないんだ。

なぜってそれを道だと言ったり

名づけたりするずっと以前から

名の無い道の領域が

はるかに広がっていたんだ。

まずはじめに

名の無い領域があった。

その名の無い領域から

天と地が生まれ、

天と地のあいだから

数知れぬ名前が生まれた。

だから天と地は

名の有るすべてのものの「母」と言える。

ところで

名の有るものには欲がくつつく、そして

欲がくつつけば、ものの表面しか見えない。

無欲になって、はじめて

真のリアリティが見えてくる。

名の有る領域と

名の無い領域は、同じ源から出ている、

名の有ると無いの違いがあるだけなんだ。

名の有る領域の向うに

名の無い領域が、

はるかに広がっている。

明と暗のまざりあった領域が、

その向うにも、はるかに広がっている。

その向うにも……

入口には

衆妙の門が立っている、

森羅万象あらゆるもののくぐる門だ。

この神秘の門をくぐる時、ひとは

本物の Life Force につながるのだ。

の道とす可きは、常の道に非ず。名の

名とす可きは常の名に非ず。名無きは天

地の始め、名有るは万物の母。故に、常

に欲無くして以て其の妙を觀、常に欲

有りて以て其の微を觀る。此の両者は

同じきより出でて而も名を異にす。同

じきを之を玄と謂う。玄の又た玄、衆

妙の門。

第四章 まず、空っぽから始まる

道の働きは、なによりもまず、

空っぽから始まる。それは

いくら掬んでも掬みつくせない

不可思議な深い淵とも言えて、

すべてのものが出てくる源だ。

その働きは

鋭い刃をまるくする。

固くもつれたものをほぐし、

強い光をやわらげる。そして

舞いあがった塵を下におさめる——

それだもんで、道のことを

谷の奥にある深い淵にたとえるのだ。

その淵に潜っていけば

果て知れない先の先までゆくだろう。

子から親へ、その親から先へと

たどってゆくのに似て、

どこでもどこまでも先がある。

やつと行きついた先の

またその奥にも先があるといったもの

なんだ。

だから私は、

誰の子かと訊かれたら、

タオという母の子、と答えるのさ。

道は沖にして之を用うるに或いは盈

たず。淵として万物の宗に似たり。其

の鏡を挫き、其の紛を解き、其の光

を和らげ、其の塵に同す。湛として或

いは存するに似たり。吾れ、其の誰の子

なるかを知らず、帝の先に象たり。(続

く)

